

聖書：ヤコブ 3：7～12

説教題：舌を制御すること

日時：2017年10月8日（朝拝）

3章に入ってヤコブは「ことば」の問題あるいは「舌」の問題について語っています。彼はこの手紙で「行い」の重要性について語っていますが、その彼がここで取り上げているのが「ことば」の問題です。私たちはともすると、行いとは手や足を動かすことに関係するのであって、口を動かすことばは行いには入らないと思うかもしれませんが。しかしヤコブは、言葉を制御できる人は体全体をも制御できる人だと2節で述べました。ですからことばの問題は、私たちが普段考えている以上に実は重要な課題であることとなります。

ヤコブはこの舌の重要性について語るために前回二つのたとえを述べました。一つは3節の「馬」です。あの大きな馬を御するにはどうしたら良いでしょう。そのカギは口にくつわをかけることです。あの小さなくつわによって、馬全体をうまく御することが可能になる。また4節では「船」が例にあげられました。あの大きな船をどうやってコントロールできるでしょう。そのカギは舵をしっかりと握ることです。あの小さなハンドルを正しく用いることによって船全体を思う通りのところへ導くことができる。同様に私たちの舌も、体の中では小さな器官ですが、ここを正しく制御することを通して体全体を正しくコントロールすることができるということでした。ところが往々にして私たちの舌は悪い働きをします。小さい火がやがて森全体を燃やすように、私たちの小さな舌も破壊的な働きをします。そこはこの世の不義の性質が強く現れる部分であり、それは私たちの人格全体を汚し、私たちの人生の車輪、すなわちライフサイクル、一生涯を燃やし尽くし、またサタンとの関わりの中にあるということが6節で語られました。今日の箇所でも続いてこの舌の問題について語られていきます。

まず7節でヤコブは「どのような種類の獣も鳥も、はうものも海の生き物も、人類によって制せられるし、すでに制せられています」と言います。ここの獣、鳥、はうもの、海の生き物といった言葉は創世記1章の天地創造の記事を思い起こさせます。神はこれらすべてのものを造られました。そして創世記1章28節で、人間に「これらの生き物を支配せよ！」という命令を与えられました。その御心に従って人類は世界をこれまで治めて来ましたし、今も治めています。一例として水族館に行けば、私たちはイルカの

ショーやアザラシのショーを見ます。良くもあそこまでこれらの動物とコミュニケーションを取り、訓練することができるものだと驚嘆します。人間よりはるかに大きな海の王者シャチさえもそうです。また動物園に行けば、キリンやゾウ、カバ、ライオン、ダチョウなど、人間に制せられているからこそ、そこで静かにしています。また家では犬や猫、ウサギ、昆虫、金魚などを飼って一緒に生活する人もいます。また畜産業においては豚や牛、馬、羊、鶏なども、人間のもとで制せられています。

ところがです。そのような人間が何と自分の舌を制することができないでいると8節に記されます。周りの大小の動物をみな見事に治めている人間が、自分の口の中の小さな器官を治められないでいる。ヤコブはここで「舌を制御することは、だれにもできません」と言います。私たちはここを読んで、もしかすると「だれにもできないと言われているのだから、私にできないのも当然だ。制御できないと言われているのだから、制御しようと取り組むことはムダではないのか」と思うかもしれません。しかしもちろんヤコブは、私たちに言い逃れを与えようとしているわけではありません。彼はこのあと10節で「このようなことは、あってはなりません」と言っています。ですから彼はこの課題についての改善を勧めています。確かにすでに2節で見たように「私たちはみな、多くの点で失敗するもの」です。ヤコブはそこに自分も含めています。しかしだからと言って現状のままでいいと言っているわけではない。むしろ彼はここに私たちの大きな課題があることを良く認識するように、とこのように言い切る形で、格言的な表現方法で語っているのでしょう。私たち皆が舌の制御において全く失敗している。この現状をしっかりと認識して、一層恵みを祈り求め、この課題に取り組むようにと。

この舌の性質について、8節に2つのことが述べられています。一つは「それは少しもじっとしていない悪」ということです。私たちの舌は静かに口の中に収まっているような時もありますが、実際はほとんどじっとしていません。何かあると突然思わぬ動きを始めます。そのため、後になってから、あんなことは言わなければ良かったとか、できればそれをしゃべる前の時点に戻って、その言葉を取り消せられたらなどと思うものです。興味深いことは、この「じっとしていない」という言葉は、1章8節に出て来た「安定を欠いた」という言葉と原語では同じであることです。1章8節でこの言葉は、二心の人の特徴として語られていました。そしてまさにこの後、舌の問題の根本にあるのは、この二心という問題であることが語られます。私たちの舌がじっとしていないのは、何よりも心がそうであるからです。神に対する思いで一つにまとまっておらず、落

ち着いていない。その安定を欠いた心の状態が、私たちの舌に「じっとしていない」という形を取って現れ出るのである。

もう一つ8節で言われていることは「死の毒に満ちている」ということです。いくら舌が動いても無害ならまだ良いのですが、私たちの舌から出る言葉には往々にして毒があります。それは死をもたらす毒と言われています。これは当時一般にあった「サタンの舌には毒がある」という考えをもとにしたものと考えられます。詩篇140篇3節にもこうあります。「蛇のように、その舌を鋭くし、そのくちびるの下には、まむしの毒があります。」ここに暗示されていることは、私たちが口から出す悪いことばはサタンと関係しているということです。それはサタンによって火をつけられ、サタンが持つ毒性を媒介するものとなっている。制御しない舌から発される言葉はサタンの毒をまき散らすものであり、それによって多くの人々に災いと死をもたらすということです。果たして私たちの言葉に、このような毒は盛られていないでしょうか。

9節以降ではさらに私たちの舌の悲しむべき現実について語られています。特にその二重性についてです。9節前半にまず「私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ」とあります。これはもちろん良いことです。私たちの舌はまさにこのために造られたと言っても言い過ぎではありません。ところが私たちはその「同じ舌をもって、神にかたどってつくられた人をのろいます。賛美とのろいが同じ口から出て来るのです」と続きます。ここで私たちが呪う人間のことが「神にかたどって造られた人」と言われています。創世記1章で私たちは「神のかたちに造られた」と言われています。これは聖書が人間の本質について語っている大切な真理です。創世記9章で、人を殺してはならないと言われている際に、その根拠として述べられているのも、神は人をご自身のかたちにお造りになったからということでした。従って神にかたどって造られた人間をのろうことは何を意味するのでしょうか。それはそこに刻まれている神ご自身を呪うことです。当時、王や皇帝は、自分が治める町々に自分の像を立てました。その像に向かって誰かがあざけりや呪いの言葉を吐いたらどうなるでしょう。「これは単なる像に過ぎないから！私は王や皇帝に向かって直接言ったわけではないから」と言い訳したところで通用しません。その人は王や皇帝を呪った者として断罪されるでしょう。とすれば神にかたどって造られている人間を呪うことも同じことになります。私たちはここから改めて一人一人は神のかたちであることを覚えさせられます。ですからどんな人に対しても、私たちは神に対する敬意をもって接し、またそれにふさわしいことばをもって

語らなければなりません。もし今日この会堂で神を賛美し、礼拝したつもりでいても、ここから出て行った後で誰かの悪いうわさ話をしたり、陰口を話したり、呪ったりするなら、その人は矛盾したことをしていることになります。その人自身は神を礼拝したと思っているかもしれませんが、その礼拝は正しくなかったと言わなければならない。それは偽善的な礼拝、二心の礼拝である。ヤコブは「このようなことがあってはなりません」と言います。

そして最後の 11～12 節で、三つのたとえを語ります。一つ目は 11 節：「泉が甘い水と苦い水を同じ穴からわき上がらせるといふようなことがあるでしょうか。」 当時、泉は人々の生活のために欠かせないものでした。泉があるところに町はでき、人々の生活が成り立ちました。甘い水とは人々が飲むことができる純粋で新鮮な水のことで、一方の苦い水とは飲むことができない汚い水、あるいは後から出て来る塩辛い水のことで、一つの泉からこの両方が出て来ることはまずない。さっきまで甘い水を出していたのに、突然苦い水を出し、また時間が経つと甘い水を出すということはない。なのに私たちは同じ一つの口から賛美とのろいの両方を出している！

二つ目のたとえは 12 節前半：「私の兄弟たち。いちじくの木がオリーブの実をならせたり、ぶどうの木がいちじくの実をならせたりするようなことは、できることでしょうか。」 いちじくの木はいちじくの実をならせるでしょうし、オリーブの木はオリーブの実をなさせます。ぶどうの木はぶどうの実をなさせます。木と実は一致します。ですから私たちの心がもし良い木の状態にあるなら、そこから悪いことばや苦々しい言葉が出て来るはずがありません。もし悪いことばを出しているなら、それは私たちの心について何を語っているのでしょうか。イエス様はマタイの福音書 7 章 18 節でこう言われました。「良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。」 そして 20 節でこう言われました。「こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。」 私たちのことばも、この実に当たります。また先週も引用したマタイの福音書の 12 章 34～35 節にはこうありました。「心に満ちていることを口が話すのです。良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。」 外に出る言葉は、それが出来来る倉、すなわち私たちの心の中の状態を表しています。果たして私たちの言葉は私たちの心がどういう状態であることを示しているのでしょうか。それは目に見えない、たちの心の中について何を物語っているのでしょうか。

三つ目のたとえば 12 節後半：「塩水が甘い水を出すこともできないことです。」 細かな点を気にし出すと難しく思われるかもしれませんが、ヤコブが言いたいポイントは明らかです。塩水とは先に出て来た苦い水に対応しています。つまりここの意味は、悪いものは良いものを生み出すことができないということです。悪いものから良いものは出て来ない。ですからもし私たちの心が正しい状態ではなく、神の臨在のもとで歩んでいるのでないなら、そういう私たちから良いもの、すなわち純粹で人の徳を建てるような良い言葉は出て来ない。塩水からは甘い水は出せないのです。

私たちは以上のヤコブの言葉の前に自らを振り返ってどうでしょうか。「賛美とのろいが同じ口から出て来る」と聞く時、まさにこれは自分の現実だと誰もが思うでしょう。もし一つしかない私たちの口から賛美とのろいの両方が出て来るとしたら、それは私たちの心について何を示しているのでしょうか。それは私たちの心が二心になっているということではないでしょうか。神を愛すると言いながら、同時にこの世を愛し、心がバラバラに分かれ、フラフラしている。心が一つにまとまっていない。その落ち着きのない心の状態が、そのまま言葉となって外に現れ出ている。従って大事なものは私たちの心の状態です。神にこそ心に向け、神との交わりを求め、神に信頼する一つ心に統一していただくこと。そして御霊によって心を新しくされて、キリストにある救いを喜び、キリストの平和に心を満たしていただき、キリストを主として従う歩みを祈り願って行く。そのように心が一つにまとめられる時、私たちの口からは、その心の状態を映し出す言葉が外に出て来るようになる。内にあるものがそのまま外に出て来るようになる。そしてそのようにしてまず舌の制御に気をつけて取り組む時、体全体も制御することができる者へと導かれて行くということではないでしょうか。塩水が甘い水を出すことはできません。今一度、自らの心を点検し、この心を聖めていただくことを祈り求めたいと思います。そして神との正しい関係から、その心を映し出す言葉を外に出す者となりますように。そしてこの訓練と聖めを経て体全体も主の栄光のためにささげる真に幸いな歩みへ導かれて行きたいと思います。